

2026 年 10 月 14 日 高の原教会 聖書講座および晩祷会 徳田 信

テーマ：涙の向こうに、神の国

聖書：イザヤ書 25 章 1～9 節／マタイによる福音書 5 章 1～12 節

交読詩編：詩編 146 編 1～10 節

1 はじめに

昨年 11 月 9 日、赴任前にこの教会で語った説教の題は「幸いへの逆方向」でした。そのときも、マタイ福音書のこの箇所を読みました。私たちは、元気でいられること、安心して暮らせること、人から認められることに幸せを感じます。しかし主イエスがまず幸いを告げられたのは、貧しさや悲しみを抱える人々です。その言葉に、改めて耳を傾けたいと思います。

「日毎の糧」で同じく選ばれているイザヤ書は、神がすべての顔から涙をぬぐうことを告げます。これは、主イエスが悲しむ人々に幸いを告げるマタイ福音書と共鳴します。悲しみのただ中で、神の国の約束はどのように聞こえるのでしょうか。「涙の向こうに、神の国」というテーマで、二つの箇所を読んでいきたいと思います。

2 貧しい人の逃れ場となる神 イザヤ 25 章 1～5 節

イザヤ書 24～27 章には、地上の世界に対する神の裁きと、その先に訪れる救いが描かれています。その中で 25 章は、神をたたえる歌から始まります。ただ、その歌の中には、堅固な町が崩され、廃虚となるという厳しい言葉もあります。なぜ町が壊されることを喜ぶのでしょうか。

その意味を考える手掛かりは 4～5 節です。神は貧しい人、苦しむ人の逃れ場となり、暴虐な者たちの勢いを押しとどめます。嵐を避ける場所や、焼けつく太陽を遮る日陰にたとえられています。人を脅かしていた力が退けられ、苦しめられてきた人が守られる、、、その神の働きが賛美されています。

ここで崩される町が具体的にどの町であるかはわかりません。また、この言葉を、自分たちと対立する相手が滅びればよい、という願いに重ねるべきではないでしょう。聖書本文が目に向けているのは、強い者の陰で苦しんでいた人々です。私たちは、立派さや力に目を奪われると、その陰で困っている人々のことを忘れてしまうことがあるかもしれません。神がおられるのはどこかを意識しながら、この賛美を聞きたいと思います。

問い 今、安心して身を寄せる場所を必要としているのは、どのような人たちでしょうか。神が「逃れ場」であることは、どう実感できるのでしょうか。

3 すべての民のための祝宴 イザヤ 25 章 6～9 節

6 節からは、山の上で開かれる祝宴が描かれます。「この山」は、シオンの山（エルサレム旧市街の南西にある標高 765 メートルの丘）を指します。神はそこで、よい肉と熟成したぶどう酒を用意されます。神の救いを、食べ物を味わい、喜びを共にする場面としてイメージさせているのです。飢えや不安の中を生きてきた人にとって、安心して食卓につけることは、命が守られていることの分かりやすいしるしです。

そして、その宴は「すべての民」のために開かれます。イスラエルに語られた約束が、国や民族を越えた人々へと広がっています。神の救いに招かれる範囲は、私たちの「仲間」に限られないのです。一緒に食卓につく姿を想像しにくいような相手にも、神の招きは向けられています。

続いて 8 節では、すべての民を覆うものが取り除かれ、死が永遠に呑み込まれると告げられます。人をのみ込んでしまうように見える死が、神に呑み込まれる、、、そして神は、すべての顔から涙をぬぐい、人々の恥を取り去る、と語られています。

ただし、ここで悲しみは、早く忘れなさいと片づけられてはいません。今も私たちは死別を経験し、涙を流さざるを得ないような出来事に会うことがあります。ここでの救いの約束と目の前の現実との間には、なお隔たりがあるように感じられます。

しかし神は、涙を流す私たち一人ひとりに心を向けています。9 節で繰り返されるのは、神を待ち望むという言葉です。教会は、復活した主イエスを仰ぎつつ、この希望を受け継いできました。パウロも、復活について語る中で、イザヤのこの言葉を引用しています

（I コリント 15 章 54 節）。悲しみの中でも、死が最後ではない、、、その望みを、私たちは代々の信仰者たちと共に抱くことができます。

4 イエスが幸いを告げる人々 マタイ 5 章 1～3 節

マタイ福音書の 5～7 章は「山上の説教」「山上の垂訓」と呼ばれます。その直前には、主イエスが病気や痛みを苦しむ人々を癒やされ、大勢の群衆が従って来たことが記されています（4 章 23～25 節）。その群衆を見た主イエスが山に登ると、弟子たちが近くに来て教えが始まりました。群衆もその教えを聞いていたことが分かります（7 章 28 節）。日常に痛みを抱える人々が、ともに主イエスの言葉に耳を傾けました。

最初に幸いを告げられるのは、心の貧しい人々です。これは、単純に心が狭いという意味ではないでしょう。旧約聖書に描かれる貧しい人々の姿を背景に、神の支えを切実に求める人々を指します。自分の力ではどうにもならず、助けを求めるほかない、、、そうした人々に、天の国が約束されています。心のあり方だけでなく、生活の貧しさも含まれています（ルカ 6 章 20 節）。また、この言葉を、十分に謙遜になれた人だけが神に受け入れられる、という「新たな条件」として読まないよう気を付けたいと思います。

「天の国」は、死後に行く場所という意味だけに留まりません。神の支配、つまり神が王として治めてくださることです。3 節と 10 節では、それがすでにその人たちのものと語られます。神の救いが完成する日を待ちつつ、「今ここで」主イエスの言葉によって支えられて生きることができるのです。

5 悲しむ人々と義に飢え渴く人々 マタイ 5 章 4～6 節

悲しむ人々には、慰めが約束されます。大切な人を失った悲しみ、自分の過ちを悔いる悲しみ、傷つけられている人を見て覚える悲しみ。悲しみの理由は様々でしょう。主イエスは、そのような悲しみの中にある人に、神の慰めがあることを示します。イザヤ書の涙をぬぐう神の姿も重なります。

主イエスの言葉を聞く私たちも、悲しんでいる人の話を聞いたり、うまく言葉を出せないながらも共に時間を過ごしたりすることができます。まったく救い、神の国の完成の約束を信じつつも、悲しみを無理に無くそうとせず、しっかり受け止めることも大切です。

柔和な人々には、地を受け継ぐという約束が与えられます。ここには詩編 37 編 11 節が響いています。力で奪い取る人々が得をするように見える世界で、神は柔和な人々に生きる場所を与える、というのです。主イエスも、御自分を柔和な者と語りました（11 章 29 節）。主イエスの歩みに照らすなら、柔和さとは、相手を力でねじ伏せることを選ばず、神に信頼して生きようとする姿だと考えられます。

義に飢え渴くとは、神の御心にかなう正しさを、生存のための食べ物や水を求めるように、切実に願うことです。自分の生き方を問うことも、周囲や世界が不公正に苦しんでいることに心を痛めることも、そこに含まれるでしょう。自分が正しいと満足している人よりも、まだ正しさが実現していないことを痛みとして知る人に、神が満たしてくださるといふ約束です。

問い 悲しむ人、柔和な人、義に飢え渴く人への約束を、どのように受け止めるでしょうか。今の自分や身近な人に重なる言葉はあるでしょうか。

6 憐れみと平和に生きる マタイ 5 章 7～12 節

後半には、憐れみ深い人々、心の清い人々、平和を造る人々が挙げられます。苦しみの中で神に支えられる人々が、隣人とどう関わるのかも考えさせられます。憐れみは、相手の苦しみに心を寄せ、必要な助けに関わることにつながります。心の清さは、外からの評価よりも、私たちの心の奥深いところで神に思いを向け、誠実に生きようとすることでしょう。憐れむ人には神の憐れみが、心の清い人には神を見ることが約束されます。人への関わりと、神との関係が結びついています。

平和を造る人々は、神の子と呼ばれると約束されます。争いを露わになっていなければ平和だ、ということではないでしょう。誰かが我慢を重ね、何も言えずにいるとしたら、その声に耳を傾ける必要があります。互いの事情を知ろうとすること、傷つけられた人を守ること、自分の過ちに気づいたときには謝ること、、、平和を求める歩みには、そうした具体的な関わりが含まれるはずです。

ただし、そのような歩みがいつも周囲から好まれるわけではありません。10～12 節では、義のため、主イエスのために迫害される人々にも幸いが告げられます。人から退けられても、神はその歩みをしっかり見てくださっている、、、ここに希望があります。もちろん、批判されたことだけで自分の正しさを判断することはできません。何を問われているのか謙虚に耳を傾けることも必要でしょう。

山上の説教が描く「幸いな人」の姿には、主イエスご自身が重なります。主イエスは、弱い立場の人を受け入れ、悲しむ人と共におられ、敵意の中でも愛することをやめませんでした。十字架につけられたこの方を、神は復活させました。私たちは、この主イエスを見つめて人生を歩んでいきます。

問い 身近なところで平和を造るために、聞く必要のある声や、改めたい関わり方はあるでしょうか。

7 涙を抱えたまま神の国を望む

「涙の向こうに、神の国」。その約束を今すぐ実感できない日もあるでしょう。それでも、主イエスが幸いを告げたのは、今、悲しんでいる人々でした。涙を流すその人に、神の慰めが約束されています。神が涙をぬぐってくださる日を望みながら、私たちも隣にいる人の悲しみに心を向けるよう促されています。主イエスは、神の御心が地上で行われるよう祈ることを教えました（マタイ 6 章 10 節）。

交読する詩編 146 編も、飢えた人、捕らわれた人、寄留者、孤児や寡婦を顧みる神を描いています。

去年の説教でご紹介したことですが、かつて私が牧会した教会で、20 年後の教会に何を願うか、皆で話したことがあります。そのとき、一人の女性が「20 年後も、今と同じように、みんなと一緒にいたい。こんな風に一緒にご飯を食べていたい」とお答えになりました。私はその願いに、教会の大切な姿を教えられました。どこかに悲しみを抱えたままでも共にいること、そこに神の救いが始まっています。

問い 今日の箇所で心に残った言葉や、もう少し考えてみたいことがあれば分かち合いましょう。